

身体接触を伴うスポーツの経験が 心の発育・発達に与える影響 ～大学アスリートに対する調査から～

齋藤 実 (経営学部教授)

スポーツ時における身体接触は外傷を引き起こす要因の一つであり、事故が生じた場合には責任問題に発展する可能性がある。このことから、近年では身体接触を伴う競技種目が敬遠される傾向や、競技特性から身体接触を排除したようなルールにて変更するスポーツもある。その一方、学校内を含む若年層の暴力事件やいじめ問題で“他者の痛みを知らない”ことが語られることがある。これらには、身体接触の機会の少なさがその一因となっている可能性はないだろうか。本研究では、これまで注目されてこなかった身体接触を伴うスポーツが、心の発育・発達に与える効果を明らかにすることを目的とし、成人期を迎えた大学生を対象としてその調査を行った。

調査は、大学体育会強化部に所属する学生439名を対象とし、質問紙による調査を行なった。本研究で使用する質問紙の作成にあたり、予備調査として自由記述にて回答を得られる4項目のスポーツのイメージと教育効果に関する質問からなる質問紙を作成し、99名のスポーツ指導者から回答を得た。その回答をテキストデータ化し、Text Mining Studio (NTT数理システム社製) を用いてテキストマイニングによる分析を行った (身体運動文化学会2014)。その分析結果から、スポーツのイメージと教育効果に関する特徴語として、「礼儀」、「人間力」、「コミュニケーション能力」、「思いやる」、「仲間」、「規律」、「厳しい」、「忍耐力」が抽出された。これらの調査結果を参考にスポーツの心理学的効果に関する先行研究を実施するにあたり、調査時に対象の負担とならない数の範囲にて、アスリートへの質問として適していると考えられる質問項目を抜粋した。抜粋した質問項目は43問であった。

回収した質問紙をコンタクトスポーツと非コンタクトスポーツ、接触有リスポーツの3グループに分けて分析を行った。コンタクトスポーツは計156名、非コンタクトスポーツは計92名、接触有リスポーツは計191名であった。分析は二元配置分散分析を用いて行った。調査実施に際し、調査の目的とデータの分析方法

を対象者に説明し承諾を得た。なお、本研究は専修大学スポーツ研究所研究倫理委員会の承認を得た。

結果と考察

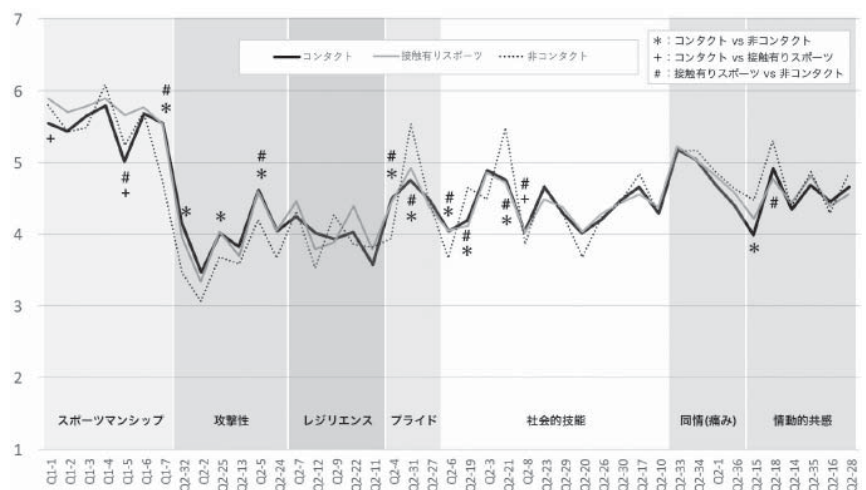
本調査では、「スポーツマンシップ」、「攻撃性」、「レジリエンス」、「プライド」、「社会的技能」、「同情 (痛み)」、「情動的共感」の7つの心理面について質問紙による調査を行なった。大学アスリートを対象に調査を行ない、コンタクトスポーツと非コンタクトスポーツ、接触有リスポーツの3つのグループに分類して分析した結果、3つの特徴を見ることができた (図)。一つは、「レジリエンス」において、各グループ間に差のある質問が見られなかったことである。二つ目は「同情 (痛み)」と「情動的共感」において、コンタクトスポーツと非コンタクトスポーツに差がなかったことである。「誰かが助けを必要としているとき、助けてやりたい」、「困っている人たちがいてもかわいそうだ」という気持ちになる」などの質問からなる「同情 (痛み)」や「情動的共感」は、心身ともに痛みを感じやすいと考えられるコンタクトス

ポーツにおいても、非コンタクトスポーツと差は認められなかった。三つ目は、コンタクトスポーツと接触有リスポーツに類似の傾向が認められたことである。接触有リスポーツでは、戦略的に身体接触を行う場面が多くあることや、本研究ではそれぞれのグループに対人種目とチーム種目が混在していることがその要因の一つとなっていることが考えられる。

大学アスリートを対象とした本研究の結果からは、コンタクトスポーツにおいて同情 (痛み) や情動的共感の心理面に与える影響は見ることができなかった。一方で、「攻撃性」が非コンタクトスポーツよりも高い傾向にあったことは、注目すべき点といえるだろう。先行研究では、スポーツ実践者の心理面は、競技レベル、競技経験年数、集団スポーツか個人スポーツか、などの要因によって変わることが報告されている。コンタクトスポーツが心理面に与える影響の詳細については、更なる調査が求められる。

共同研究者：後藤肇 (専修大学)、Blake Bennett (University of Auckland)、小澤聡 (常磐大学)

本研究は「幼少年期における身体接触を伴うスポーツの経験が心の発育・発達に与える影響 (JSPS 科研費 26560420)」の助成を受けたものである。



大学アスリートにおける
コンタクトスポーツ実践者と非コンタクトスポーツ実践者の心理面の差